
Square the Circle

風花くるり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Square the Circle

【Nコード】

N1628E

【作者名】

風花くるり

【あらすじ】

場所は現代日本みたい。で、男性アイドルが主人公。でも、芸能界の話にあらず。終わりはアンハッピーを想定。心理描写^{しているつもり}特化。暗し……メンヘル系

「すっげえー！」

歓声をあげるタケルに、緊張が走るのがわかった。

「あぶないよ、タケル」

今にも口笛でも飛び出しそうなテンションで、身を乗り出すから注意をする。

だけどヒヤッハツハツと笑って、覗き込むのはやめようとはしない。まあ、もとより聞くとおもうていないが。

明るく元氣と評判のタケルが、実のところ一番壊れているのを俺達は知っている。

どうして誰も気づかないの？ 周囲の愚かさを嘲笑いながら、それでも心の片隅で気づいてくれと願っていた。

それはもうかなわないことだけれど……。

俺がタケル及びその他3名と出会ったのは、1年ほど前のこと。その時にはもうすでにダメだったのだと思う。

俺達は会おうのが遅すぎた。

違和感は俺達の距離が縮まるにつれて大きくなっていた。でも確信をしたのはあの日……。

その日、俺達は楽屋で騒がしく差し入れの軽食を奪い合っていた。その中心で騒いでいるのがタケル。

俺達の中で一番小さく、細身のクセに一番よく食う。

しかも食い意地がはっているもんだから、こんな時率先して奪いに行くわけだ。

逆に、一口くらいは食べたいなーなんて思いつつ、だけどそこへ突入するのをためらうのが俺で、騒ぎ立てるガキどもに食傷気味になって傍観者に徹するのがサトシ。

タケルの横でアキラが俺にもよこせと、タケルと張り合える騒々しさを存分に発揮して叫ぶ。

口よりも先に手がでるのがリョウ。不言実行できっちり自分の取り分を確保。

欠食児童かってぐらいに最後の一片まで奪い合うその姿勢に、食べたかったことも忘れて感心していると、横でサトシがつぶやいた。「てめえらは人間じゃねえ」

見事に散らかったソレを、ありつけなかった俺がなんで片付けてるんだろなー、なんて思いながら適当にまとめている時だった。

リョウは手伝ってくれて、サトシが呆れた顔で見えて、アキラは俺の隣にあった椅子に腰掛けて携帯をいじりだしていた。タケルはテーブルをはさんだ俺の真正面。

「邪魔だよ、タケル」

お前が言っになって感じのアキラがそう言っのと同じくらい。

「いたッ」

俺の指先に痛みが走って、慌てて見たら線が一本。みるみる真紅の液体が玉を結ぶ。

男にしては珍しいことかもしれないが、俺は血がまったく平気だった。

と言うより、血の紅が好きだった。他人を傷つけて見ようとする

ほどこかれてはないが、自分が怪我して流れる様に見入るぐらいには。

「どうした？」

リヨウが覗き込む。

「厚紙で切った」

「厚紙っ！ ソレ、地味くに、でもすっげえ痛いじゃん」

顔もあげないでアキラがそう言い、眉間にしわを寄せた。

こんなに厚さがあるのに切れるんだなあ、なんて思いながら血が流れたすのを見ていた。

「段ボールで切ったって話も聞いたことあるぜ？」

「それ痛いっ！ つーか聞きたくねえよ！」

「紙は切れ味が悪いからスパツときれいな切り口にならないんだって。つまり、傷口がギザギザ。だから小さい傷のわりに痛みが大きいいんだってさ」

「聞きたくねーって言うてんだろっ！ このサドシっ！」

携帯を放り出すかのような勢いのわめき声を聞きながら、ふといつもなら一番うるさいはずのタケルが静かなことに気づいた。

顔を上げると俺の指先を凝視している姿。思わず呼び掛けようとする俺をさえぎったのはリヨウの声だった。

「いい加減、止血しろ」

「あ。……ああ、そうだな」

片手に消毒液を持ちながら、同意した俺の手首をつかもうとしたリヨウ。

だけど先につかんだのはタケル。

ピチャリ。

柔らかな舌が血を、舐めた。

声を発することどころか、身じろぎ一つすることもできなかった。それは皆同じようで、息を殺して舐め齧るタケルを見つめ続けた。

例えばかすかでもなにかしらの音を立てれば均衡が崩れると、無意識に感じ取っていたのだろう。

だが、そうしていても、終わりがぐんぐん近づいて来ている気がして、悲鳴を上げそうになる自分を懸命に抑えつけた。

いくら柔らかいとは言え、傷口に触ればチリリと痛む。

そして傷口に触れると言うことは、終わりが来たってことで……。

そして、動きを止めたタケル。

恐る恐る。

でも声は震わさないように。ひっそりと。

「タケル？」

ガタンッ！

でかい音と、尻にガンッと来た衝撃、脳みそが状況を把握できずにぐらぐらする。

衝撃が収まり、急いで目を開けた。

「……喰いたい」

すぐ目の前にあったタケルの唇がそんな言葉を紡いだ。

「喰って、全部俺の中に……」

どこにも行かさないように……。常に共にあるように……。

「……俺を？」

「お前も、だ」

イケナイコトを言ったみたいにつつむいちゃったから、タケルが今どんな顔をしているかわからない。

でも……。

「愛されてるな、俺」

弾かれたように俺を見たタケルに違うのか？ という意味を込めて笑いかける。

タケルは泣き笑いみたいな顔をして、言った。
「だから、お前だけじゃないって」

愛しくて哀しくて……ぎゅっと抱きしめた。
……泣きたかったけど、泣けなかった……。

どうすればいいかもわからずに、ただ俺達のせいで加速される崩壊を見てきた。

今の時代、人間は狂うんじゃない。気が違うんじゃない。
壊れる。

それこそ、ツクリモノのように。

「水臭い」

弱い反論を俺と同じ歳のリョウが一刀両断にした。

そう、水臭い。

サトシはわずらっている。

それは、もう入院とかしておかないといけない段階なんじゃないかと思う。教えてくれないからわからないけど。

でも今すぐ死ぬってわけじゃないらしい。サトシがそう言ったただけだから、本当のところはわかったもんじゃないけど。

でもずいぶん前から、サトシは死を見つめていたのだ。気づかずに、どうか一本神経の抜けたテンションで面白おかしく未来を語る俺達の横……サトシは死を見ていた。

そんなことずっと俺達に気取らせなかったし、気づかなかつたらあっさり1人引退してそのままフェードアウトとかしたに決まっている。

俺達が気づいたのは、たまたま。

体力が落ちていくサトシに、『もうおっさん化?』なんて茶化していた俺達が知ったのは、ホント、たまたま。

その日は一際サトシの動きのキレが悪かった。

だからと言って、その長い手足が動く様は優雅でいつもと変わらない。

ただ最近、一緒にやっている俺達が違和感を感じる程度の微かな

異常が増えていた矢先のソレに、俺達の脳裏に少し不安がよぎった。タケルやアキラですら、俺やリヨウに問いかけるように視線を送ってきたくらい。

俺達の前ですら常に完璧であつたサトシがそんなことを感じさせるなんて、昔から考えるとありえない話だったから。

楽屋に戻るなり壁にもたれ座り込んだサトシの周りに集まつた俺達。大丈夫だと言いながら煩わしそうなサトシは、その時致命的なミスをした。たぶん、普段のサトシならばしないであろうミス。

俺達の追及から逃れるように確認もせず出た携帯。金切り声の女性と言つた一言は、すぐ傍にいた俺達にも十分聞こえた。

『病院に行つてないってどういう事ッ！』

俺達の前で電話を終えたサトシを当然ながら俺達が問い詰め、完璧でないにしても聞きだした事柄は、病気であること、そう長くはないこと、でもそんなすぐに死ぬわけではないこと。

……俺達には最後まで秘密にしようと思つていたこと。

すべてを聞き終えた俺は、なんとも言えずに……ただサトシの投げ出された左手から滑り落ちそうになっている真紅の携帯を眺めていた。

サトシが帰るぞ、と皆に言うまで、ずっと。

ずいぶん日数を必要として眩暈のする現実を俺がやっと受け入れられた時には、タケルは更に壊れていた。

何をおいてもタケルの傍にいてやるべきだったと、気づいた時には遅かった。

なんだって俺は、
いつだって俺は、
肝心な部分で後手後手に回っ
てしまうんだ。

「まだ？」

アキラがリヨウに尋ねた。

「まだ」

手も休めずリヨウが短く返す。

「「ちえっ」」

こんな時ばかり双子のようにぴったり声のそろつ、タケルとアキラ。

さつき腕を止めたので2セット目をやり直しすることにしたらしいから、もう少しかかるだろう。

ゆっくり時間をかけて腹筋をしているリヨウを見やる。

正確に言つとカタカナの名前がついているらしい……リヨウが言つてた……が、腹筋トレーニング法の種類なんて俺は覚える気がなかったたので記憶に残っちゃいない。

ついでに言つと、いまさら調べる気もないので悪しからず。

そんな俺と違い、いまさら、なんて考えず日課の筋トレに励むところがリヨウらしい。

それを止めるとも言わず待っている俺たちも、らしい。

リヨウがなぜ俺たちと来る道を選んだのか、俺には理解できない。アキラと同じく、出会った仲間が俺たちじゃなかったら、リヨウはリヨウらしく健全に生きていたのではないだろうか、これからも。

「別につきあう必要はないんだぜ？」

俺がそう言ったら、表情の変化が乏しいリヨウが目を見開いた。

そんなに驚くことかよ、と思った。

あれはサトシが病院へ行くと一番に仕事を終え帰り、騒がしい二人……アキラ&タケルのコトだもちろん……を次に終わらせ、俺達二人が最後に残った日のこと。

「お前には理由がないし」

黙ったまま返事がないから続けてそう言った。

リヨウが離別の道を選んだとしたら俺はどうするべきだろう？

リヨウがまったく傷つかず生きていけるとは思えない。表面に見せなかったとしても深く深く傷つくはずだ。

俺は……。

「その言葉、お前に返す」

「……俺？」

思考に沈みそうになった俺を現実に戻したリヨウは、俺が考えてもみないことを言った。

「そう、お前」

「俺は……お前達というよ、最後まで」

そう、それは決めてある。ただ二手に分かれた場合が問題だ。

「俺もそうだ」

リヨウはきっぱり言い切った。

「でも……生きていけるだろ？ お前は」

傷ついても、一人で……。

普通に家族がいて、普通に俺達以外の友人がいて……無口で無愛想でもなぜか人が寄ってくるんだよな、リヨウは。

至ってマトモに健全に育って、たぶんこれからも真っ直ぐ生きていける。いささか真っ直ぐ過ぎるくらいがあるけど、これだけたくさんの方がいるんだ、こんなのもいいと思う。

「生きていつて欲しいのか？」

「……ああ、そんな感じかもしれない」

誰か一人くらいココに残って欲しいのかもしれない。その一人に俺がなるのはごめんだけど。

「お前には悪いがそんな気はない」

「そう」

もう腹を据えてしまっている顔つきに説得の言葉も出てこなかった。

リヨウも言う気がないのか、もうすることもないのに控え室で二人黙ったまま座り込んでいた。背中合わせで。

「なあ」

「なんだ」

寝ちやったのかと思うぐらい長い沈黙の後、俺が呼びかけるといつもどおり潔さの感じられる声が応えた。

「アキラがさ」

「ああ」

「もし、残るって言ったら、リヨウ、一緒にいてあげられない？」

「お前がいてやれ」

「俺よりさ、リヨウのがいいよ、きっと」

「言わんと思うがな」

「だから、もしだって言ってるだろ？」

「どうせ可能性のないことだ。いいだろう」

それでもさ、ココにいて欲しいな。リヨウとアキラには。

こんなコトにまでつきあいイイとかノリがイイとか、どれだけなのって話だし。

「俺さ」

「ん」

こつそり秘密を話すように。リヨウにだけささやいた。

「皆のこと好きなんだ」

珍しく素直な俺にリヨウは言った。

「俺もだ。ついでに言つと、そんなことみんな知っている」

うん、だから最後までいたいんだ。

思い返すと、じわりと涙腺にキタ。

幸いなコトに、零れ落ちるのは思いとどまってくれたけれども。

短い休憩をはさんで3セット目に入ったらしいリヨウに、お前見てると飼い主を待つしかなかったハチ公を思い出すよって言ったら怒るかな。

実際は飼い主がくれていたエサ待ちだったってぶっちゃけ話もあるけど。

エサなんかなくてもリヨウは迎えに来てくれるよね。絶対に。

ゲラゲラ笑っていたアキラがずっと笑みを消し去る。

それだけで、ガラリと雰囲気が変わる。悪ガキにしか見えなかった横顔が、年相応の男……いや下手すりゃ一番年上に見える顔になる。

アキラはメンバーに選ばれなかったら、今、ココにいなかったんじゃないかと思う。

出会ったのが俺達ではなく、もっともつと上を目指して生きてる奴らなら、そいつらと同じように生きていた気がする。

ずっと……ずっとそう思っていた。

「最高に上り詰めた時に、終わりたいな」

アキラがそう言い出すまでは。

アキラの一言には当然ながらサトシがキレた。ふざけんなと。

サトシの怒りは理解できるが、俺はそう言った時のアキラの瞳にゾクリとさせられ、言葉を失った。

別にタケルにおもねっているわけでもなく、サトシの心情が理解できないわけでもなく、本気で自身から湧き上がる感情が言わせているのを感じて。

ひやりと腹の底が冷たくなった。

タケルやサトシのように追い詰められているわけでもなく、リョウや俺のように引きずられてるわけでもない。

生きると言うことに、希望どころか絶望という感慨すらない。

根本的に違う。異質なもの。

固まって見守る俺達とは逆に、珍しく頭に血が上ったらしいサトシは怒鳴りまくった。

アキラはサトシが怒鳴り散らすのをじっと聞き、何とか言えと最後に怒鳴った時、アキラは口を開いた。

「そうは言ってもサトシ。俺は生きていくことが辛いわけじゃないけど、いつだって、今だって、生きている気がしない」

そんな返事にさらにキレたらしいサトシがさらに怒鳴ろうと息を吸い込んだ。

「無駄な労力だよ、サトシ。いまさら異文化交流を始めてる時間はないだろ？」

歪んだ口元。

思わず伸びた腕。

伸ばされた腕を拒むことなく、アキラは俺の身体を抱き締め返した。

怒鳴られようが何しようが、淡々とアキラが繰り返す言葉に、サトシが言葉少なに同意を返すようになったのはそれほど時間はかからなかった。

そして、今がその時。

リョウが立ち上がって伸びをしている。

アキラとタケルが顔を見合わせニヤリと笑う。

オヤジ臭い掛け声とともにサトシも立ち上がり歩き始める。

まだ、足元はしっかりしているのに……。

仲間が俺の名前を呼ぶ。

これにて終了。

パソコンの電源は……ま、このままでいいか。

そんじゃま、さよなら……違うか、バイバイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1628e/>

Square the Circle

2010年10月8日21時25分発行